

●日本住血吸蟲の「セルカリア」

W. W. COBT 氏は藤浪鑑博士より KOFOLD 氏に送られた生きたミヤイリガヨ (*Bianfordia nosophora*) の體より日本住血吸蟲の「セルカリア」を得其形態並に生態を観察した。材料は主に生鮮の儘時計硝子又は載物硝子上で雙眼顯微鏡或は通常の顯微鏡を用ひて檢した。特に浸油接物レンズに低度の接眼レンズを使用して好結果を得た。其他に切片標本をも作つて生體の觀察を補つた。

日本住血吸蟲即ち *Schistosoma japonicum* と他の二種の人體寄生住血吸蟲即ち *S. haematobium*, *S. mansoni* との「セルカリア」は互に酷似して居て、區別すべき明かな特徴を見出す事が出来ない、何れも體小さく二岐した尾を有し、眼點咽頭を缺き、消化管著しく退化し、體表に尖端の後方に向ふ刺狀突起を密生し、腹吸盤小さく體の後端より三分の一の位置にあり、體の後半は大なる單細胞腺によりて埋められ、其腺の導管は口吸盤を貫通して體の前端に開く、口吸盤は著しく變化し其中に前記の導管の外に今一つの腺狀體を埋藏する、排泄器は甚少數の焰細胞と左右相稱狀の排泄囊とより成り、後者は尾の中にも入り込む。

著者の本種に就ての觀察の中特に注意に値する點を擧げれば、先づ排泄囊の體部に於ける部分はV字形をなし、其後端の癒合部より一本の管出で、尾部を縦に貫き尾の分岐部で二つに岐れ、各々の枝は尾の枝の末端で一つの排泄口によつて外に開く。又排泄囊の臂の前端よりは各

側二本の集合管出で、更に二岐して毛細管となり、其終に一個づつ焰細胞を具ふ。故に焰細胞の總數は八個（各側四個宛）である。右排泄器に對する從來の研究者の觀察は何れも甚だ不完全である。

次に口吸盤は成體の者と著しく違ひ、體の前方三分の一以上の部分を占め、明に前後の二部に區分せられる。前部は即ち體の前端部をなす部分で、此部には他の體部と同様の縦走及輪狀の筋纖維がある。尤も此等筋纖維は他部で見る者より幾分太い。後部は全く體表より離れて體組織中に埋没し、其壁には殊に良く發育した輪狀筋がある。

口吸盤の中軸には囊狀の腺（頭腺—楢林氏、宮川氏）があり、稍粗な粒狀體を含んで居る。又體の後半には「Cephalic glands」（毒腺—宮入鈴木兩氏、刺腺—楢林氏）と呼ぶべき巨大な單細胞腺が各側五個宛あつて、其導管は口吸盤の組織を貫通して體の前端に開く。此腺の分泌物は多分穿入の際宿主體の組織を溶解する用をなす者であらう。同時に宿主體より出づる毒素を中和する作用も持つて居るかも知れない、前記頭腺も亦同様宿主體に穿入の際に役立つ者と思はれる。

(Univ. Calif. Publ. Zool., Vol. 18, No. 17, 1919.)

(駒井卓)

●日本住血吸蟲の「ミラシヂウム」

前項「セルカリア」に関する論文の著者 W. W. COBT

(抄 録) ○日本住血吸蟲の「セルカリア」 ○日本住血吸蟲の「ミラシヂウム」

(雜 錄) ○人虱雜記(三)

は更に「ミラシヂウム」をも研究した。其結果を摘録すれば、體の前部には消化管の原基の側に「セルカリア」で見た者に類似した「Cephalic gland」がある。排泄器は左右全く獨立で、各側の者が體の後端に近き處に一個宛ある排泄口によつて外に開く。

(ibid, No. 18.)

(駒井卓)

雜 錄

●人虱雜記(三)

戦争と虱のパンデミーとは密接の關係のあることは推知し得べく又事實歴史の證するところである。歐洲戦争が有史以來の最大戰役であるならば等しく虱軍の現出も未曾有の事であろう、そして人類同士が智力の限りを盡して闘つてゐる間に、虱に對しても同様の努力が拂はれたのである。今其有様を簡単に近着の雜誌から摘載して見よう。

虱防除の策としては云ふまでもなく各方面から、又あらゆる方法が講ぜられた、然し最も敏速に有効にそして大規模に實行の可能が證明されたのは焼殺法と蒸殺法とであつた様に思はれる、從て夫れに對して各種の裝置が案出され且實施されたのである。

蒸汽消毒樽 (Barrel steam disinfecter)

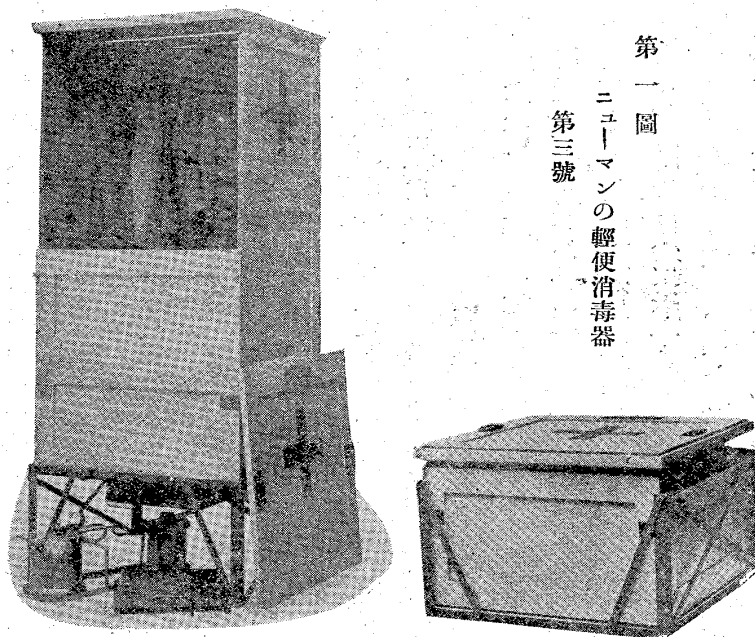
戦地で廣く行はれた者セルビアで初めて利用されたので「セルビア樽」の名が軍隊の通用語となつて居る。樽の兩底も打抜いて蓋と木製の格子とを作りつけた者である。六十ガロン入りの者なれば兵士六人の器具入と七枚

の毛布とを一時に消毒することが出來ると云ふ。これを裝置するには浅い圓形の樽底に相當する湯沸しが丁度埋まり、且其下で火を焚く餘地を存する深さの溝を堀る。湯沸は二本の鐵棒を溝に架して支へ、上には樽を重ね、

第一圖

ニューマンの輕便消毒器

第三號



者は可成多い。樽を一列に並べ共通の火力を利用した者である。或は樽と湯沸を全く離して、後者からの蒸氣を導管で前者の上側より流入せしめ、又其樽の下側に龍頭を取りつけて凝結した水を流出させる。此裝置であると

合せ目(丁度地平の高さに在るか)には粘土を盛つて蒸汽の逸散を防ぐ、而して溝の他端に煙突を立てる。斯くして間に合せの消毒器が出來るのである。樽を利用した考案